

比較文化論 : 大項目別報告 : 農耕 1300

著者	田邊 繁治
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	38-42
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003698

農 耕 1300

田 邊 繁 治*

- | | |
|---------------|---------|
| 1. 根栽農耕 | 3. 水稻耕作 |
| 2. 東南アジアの焼畑耕作 | 4. その他 |

1. 根 栽 農 耕

今日、マダガスカルから東南アジア、オセアニアにかけてひろく分布する根栽農耕の主作物は、タロイモ、ヤムイモ、サツマイモ、バナナ、パンノキ、サトウキビなどである。それらのうちタロイモ (1301)、ヤムイモ (1303)、サツマイモ (1304) などイモ類栽培の分布はかなりの程度重なりあい、それら地域の全域にひろがっている。

タロイモは時に水稻とともに水田で栽培されることがある。このようなタロイモ水田栽培(1302)は分布図における広東・広西 Yao, 紅頭嶼の Yami, ルソン島の Bontok Igorot, Ifugao およびスラウェシの Southern Toradja の事例にみられる。しかし同じ図中の Mentawai 人やオセアニアの事例は水稻栽培とは関係なく、湿地や階段状耕地 (1311) におけるタロイモのみの灌漑栽培と考えられる。水稻栽培がタロイモ水田の雑草から起源したとする説をめぐる論争があるが、少なくともこの分布図から、タロイモ水田栽培の事例は、水稻が卓越する東南アジア島嶼部においてはきわめて少ないといわざるをえない [飯沼 1977; 中尾 1977]。

また料理バナナ (1306) の栽培は、分布図上では台湾やボルネオなどで欠落し、東南アジア全域ではむしろ少なく、典型的な根栽農耕のみられるパプア諸族やオセアニアにひろがっている。クワ科に属するパンノキ (1305) はとくにオセアニアの根栽農耕地域にひろく分布している。ミクロネシアとポリネシアでは果肉が、ニューギニアでは種子が主として利用され、多くの地域でパンノキは主食となっている。

これらイモ類、料理バナナ、パンノキなどの栽培がとくに密接に重なりあってみられるのはニューギニアからオセアニアにかけての地域であり、今日の典型的な根栽農

* 国立民族学博物館第2研究部

耕文化はそこにみられるとあってよい。これらの地域に分布する掘棒 (1313) はあきらかにイモ類の栽培に用いられる農具である。しかしこれら根栽作物の栽培は広く東南アジアの島嶼部から大陸部にかけても分布している。とくに大陸部の熱帯モンスーン地帯から照葉樹林帯にかけては、オセアニアにみられるような典型的な根栽農耕文化は形成されなかったとしても、イモ類などの栽培がかなりひろく分布していることは注目しておかなければならない [佐々木 1982: 63-65]。

2. 東南アジアの焼畑耕作

森林を焼いて耕地を造成し、一定の休閑期間をおいて作物を栽培する焼畑耕作は、根栽農耕を中心とする地域にも分布し、ニューギニア、メラネシアにひろくみられる。一方、モルッカ諸島のハルマヘラ、小スンダ列島のアルー諸島を西限とする東南アジアの島嶼部や大陸部の山地においては、雑穀類やオカボを主作物とし、しばしばイモ類栽培をもとまう焼畑耕作がひろがっている。この地域における雑穀栽培 (1309)、オカボ栽培 (1307)、焼畑耕作 (1312) をおこなう民族は、それらの分布図にみられるようにほとんど一致している。

またインドシナ半島・マレー半島のモン＝クメール系山地民やボルネオの諸民族など、掘棒耕作への依存の強い地域をのぞいて、くわ (1315) の分布は基本的にはこれらの焼畑耕作と密接にむすびついている。たて杵・たて臼 (1316) は一般的に、雑穀類やイネの脱穀・精白に使用される農具である。したがってその分布は雑穀栽培やオカボ栽培と基本的に一致しているが、中国南部では Tulung、広東・広西 Yao, Li をのぞいてほとんどみられない。これらの農具はともに今日ほとんどの水稻耕作民族にもみられるものであるが、本来、オカボ・雑穀類を主体とする焼畑耕作と深くむすびついたものと考えられる。

今日みられる東南アジアの焼畑耕作は、きわめて少ない例外をのぞいて、大陸部はもとより島嶼部においても、基本的にはオカボ・雑穀＝根栽型の作物構成をもっている。表1はこの地域で焼畑耕作を行なっている108の民族を地理的区分によってわけ、それらのうちイモ類栽培をもとまう民族の数とその割合を示したものである。マダガスカルを含む島嶼部においては、イモ類栽培をもとまう民族はほぼ80%に達するのにたいし、大陸部では70%前後と少なくなる。また大陸部の焼畑で栽培されるイモ類の構成を検討してみると、アッサム・ビルマ、インドシナ・タイの両地域ではタロイモ、ヤムイモがかなり多く栽培されるのにたいし、中国南部ではむしろサツマイモを栽培

表1 焼畑耕作とイモ類栽培

地理的区分	焼畑耕作民族数	イモ類栽培民族数	%
アッサム・ビルマ	20	15	75
中国南部	14	10	71
インドシナ・タイ	13	9	69
マダガスカル	6	5	83
大スンダ	19	15	79
小スンダ・モルッカ	13	10	77
フィリピン・台湾	23	21	91
合計	108	85	79

する民族が多くなることがわかる。本研究においては作物構成、作付面積などの詳細なデータは扱っていないので、焼畑の作物構成の地域的な差異を詳しく論ずることはできないが、ほぼ上記のような傾向は指摘できるとおもわれる。

3. 水 稻 耕 作

水稻栽培は東南アジア世界の平地にひろく分布し、きわめて多くの民族のおもな生業となっている。その分布は大陸部からマダガスカルをふくむ島嶼部をおおい、スラウェシ、スンバ、フローレスが東限となっている。それ以東のニューギニアやオセアニアにみられる水稻栽培は、ミクロネシアの Chamorro で16世紀にスペイン人によって導入されたのをのぞいて、きわめて新しいものである。伝統的に山地での焼畑耕作に従事している民族にあっても、水田化は着実に進行している。大陸部と島嶼部においてなんらかの形の焼畑耕作をおこなっている 108 の民族のうち、水稻栽培に従事している民族は60%を占め、残りの40%が焼畑のみに依存している。

水稻耕作は小規模な耕地の場合には、牛、水牛、あるいは人の踏耕によって除草から耕うんまでをすべておこなうことがあり、今日でもマダガスカルから東南アジアにかけてみることができる [上山・渡部 1985: 64-73]。しかし古くから大部分の水稻耕作地域では、唐すき (1314) が主な除草・耕うん農具である。ヴェルト (Werth, E.) によって示された東南アジアにおける唐すきの形態分類と分布は、基本的に適切であると考えられる [ヴェルト 1968]。しかし仔細にみるならば、大陸部の北部では方形で支柱をもつシナ型、歴史的にインド化が深く進行した大陸南部のビルマ、タイ、カンボジアではインド型、マレー、インドネシアにかけてはマレー型がそれぞれ卓越している点が注意されなければならない。

東南アジアでは、イネはもとより雑穀類は一般的に高床穀倉（1319）に貯蔵される。これら穀類の貯蔵は穂刈りした束を収納する穂貯蔵と、モミを収納するモミ貯蔵にわけられ、その体積にしたがって穀倉の規模は異なってくる。しかしいずれにせよ、高床穀倉の分布はおおまかに水稻栽培、オカボ・雑穀栽培のそれと重なっている。しかし中国南部では高床穀倉の分布は Nu, Tulung, 広東・広西 Yao, Pulang などにかぎられ、彼らのあいだではむしろ漢族の土間式穀倉の影響が強いと考えられる。

4. そ の 他

穀物魂（4202）の観念およびそれに関連する初穂刈り儀礼（1324）、刈上げ儀礼（1325）は、東南アジアの焼畑耕作民、水稻耕作民の双方にひろく分布している。一般に東南アジアにおいては、明確に穀物魂として表象されるものはイネの魂であることが多い。大陸部の水稻耕作民においては、それは単にイネそのものの魂であるばかりではなく、しばしばそれが栽培される土地や祖先を表象することが多い。また焼畑耕作をおこなうアッサムのナガ諸族、インドシナのモン＝クメール系山地民、ボルネオの諸民族などにおいては、穀物魂（多くはオカボの魂）は、森林と焼畑のあいだを往還するものであることが多い。

一方、タイ系諸族、Burmese, Cambodian, および島嶼部の水稻耕作民においては、イネの魂は水田と穀倉のあいだを往復する輪廻のなかでとらえられ、田植、収穫、脱穀、穀倉に貯蔵するまで複雑な儀礼をとまなうことがある [岩田 1966]。初穂に魂が宿るとされる場合には初穂刈りが、最終穂や落ち穂にそれが宿る場合には刈上げの儀礼が重視されるが、双方がともに行なわれることも多い。

東南アジアからオセアニアにかけての家畜の分布をみた場合、ニワトリ（1320）とブタ（1321）はその全域にひろがっている。しかしブタの分布は特にニューギニアのパプア諸族に集中的にみられ、彼らの根栽農耕がブタ飼育およびブタの供犠と深く結合していることがうかがわれる。一方、牛（1323）と水牛（1322）の分布は東南アジアの大陸部・島嶼部におけるオカボ・雑穀栽培や水稻栽培の分布と基本的に一致し、オセアニアにおける根栽農耕からは切断されている。しかしこれらの牛類はかならずしも水田の耕うんや運搬のような生産手段として利用されるばかりではなく、もっぱら儀礼用に飼育されている場合も多い。こうした視点からみた場合、牛類供犠（4209）が東南アジアのオカボ・雑穀栽培をおこなう焼畑耕作民の分布とかなり近似していることが注目される。牛や水牛、さらにより小型のニワトリやブタなどの供犠は、個人

の通過儀礼やさまざまなレベルの共同体の守護霊儀礼、あるいはアッサムのナガ諸族、スラウェシの **Southern Toradja** などにみられるいわゆる勲功祭宴 (4211) に関するものである [ハイネ=ゲルデルン 1961]。したがって、焼畑耕作民のあいだにおけるこれらの家畜の分布は生産技術としてのみではなく、供犠獣としての象徴的性格 (階層性や対立関係) および地位体系・社会秩序の再生産との関係としても分析される必要があるだろう [cf. 山下 1975]。